

# 『フロス河の水車場』と『鐘』における 女性たちの道徳的目覚め

杉浦千秋

## 序

ヴィクトリア朝を代表する女性作家 George Eliot (1819–80) と45年に及ぶ作家生活で26冊の小説と数冊の哲学書を著した Iris Murdoch (1919–99) は、ともにイギリスを代表するモラリスト作家と評される。二人の作家たちの生年・活躍の時代にはちょうど百年の開きがあるが、ヴィクトリア朝ミドルクラスの道徳観の中で生きる人びとを小説に描くエリオットと、第二次世界大戦後のイギリス社会で高等教育を受けた登場人物たちの生き方の葛藤を描くマードック、二人の作家たちの作品は我々読者にどのような道徳観を示そうとしているのか。

マードックは第一作目の小説『網のなか』(1954)で作家としてデビューする前からオックスフォード大学で道徳哲学を講じていたため、その経歴は常に彼女の作品への影響として言及されている。小説出版の前年には『サルトルーロマンティックな合理主義者』(1953)を世に問うて、彼女が哲学者として敬服してやまないサルトルを小説家としては厳しく批判すると同時にマードック自身の小説に対する特色や方向性を明確にしている。一方のエリオットは『牧師館物語』(1858)を出版して作家の道を歩み始めるがそれ以前には急進的哲学の機関誌『ウェストミンスター・レビュー』の編集者を務めていた。その時期に Herbert Spencer や John Stuart Mill など多くの知識人と親交を持ち、公私にわたる支援者である批評家の George Henry Lewes (1817–78) との出会いもこの時期に果たす。編集者を辞した後は評論や書評を『ウェストミンスター・レビュー』や『リーダー』に寄稿する。この時期の経験は職業としての哲学者

のキャリアのないエリオットに該博な知識をもたらしたばかりか、後の作家としての執筆姿勢や基本的思考を確立するのに役立つ。

本論では上記したように百年という時代を超えた二人の作家たちが以下に紹介するそれぞれの作品において示す女性観、道徳観の考察を目的とする。エリオットの『フロス河の水車場』(*The Mill on the Floss*, 1860)のMaggie Tulliverとマードックの『鐘』(*The Bell*, 1958)のDora Greenfieldに焦点を当て、二人の若い女性たちが道徳的に目覚める場面と、その後二人が下した決断を分析する。二人の女性たちが覚醒の後に辿る変化の過程は、結果として道徳的成長の過程と言い換えられるのであるが、その過程を分析することによって作品におけるエリオットとマードック二人の作家の女性観、道徳観を明らかにできればと考えている。

彼女たちの女性観や宗教観などの思想的背景は次章以降の議論の中で検証することとして、まず物語の概要や二人の女性主人公の特徴を把握するための一助になると思われる二つの物語の語り手の分析から始めたい。

## 1. 全知のナレーターと饒舌な登場人物たち

エリオットの四作目の小説である『フロス河の水車場』は、出版当時は女性のビルドゥングスロマンとして稀な例である、自叙伝的小説、悲劇的な最期など様々な見方がされ、特に物語後半部・結末には賛否両論だった。Avrom Fleishamanはそれらに加えて「中産階級市民の小説であり神話的小説<sup>1)</sup>」という見解を述べている。物語は牧歌的な自然描写から始まる。広大なフロス河、その支流のリプル川の岸辺にタリヴァー家の水車場がある。水辺の木々、水音、穀物を運ぶ馬車の馬たちを生き活きと懐かしさのこもる眼差しで語るナレーターは誰なのか。エリオットの小説ではこのナレーターが大きな役割を負っている。Nancy Henryは‘omniscient narrator’と呼んでナレーターが物語全体を俯瞰しているかのような存在と見ている。彼女はエリオットの代表作とされる『ミドルマーチ』(1871-2)の解説において、作者が1829-30年の物語の時代と執筆した1870年代との間をナレーターに自由に行き来させていると述べる<sup>2)</sup>。『フロス河の水車場』についても同じ手法で、物語の舞台は19世紀初

頭であるが出版は1860年であるからナレーターは数十年前を見ているのである。ナレーターは読者に数十年後のヴィクトリア朝を知ったうえで登場人物たちの言動について我々に問いかけもし、時には是非の判断を任せていると推測する。

自叙伝的小説という意見からすればこのナレーターはまさにエリオットその人になる。時として主人公マギーの言動に同調し、衝動的行動をまかぼう。また新興中産階級で成功組である伯母たちの物質主義的な会話を揶揄し、成長後のマギーの恋の成り行きには手厳しく道徳観を説く。水車場を持つ中産階級のタリヴァー家の長女マギーは、物語前半では色黒で黒髪を持ち「奇妙な子」(125)と言われることもあるが、読書好きで知的な少女として生き活きと描かれている。兄トムとのけんかや仲直り、ジプシーとの一件、従妹ルーシーを泥んこに突き落とすなど母親を嘆かせるマギーの行いは数知れない。しかしナレーターはそんなマギーを優しい視点で語る。利発なマギーだが当時の女子教育では当然ながら兄トムのような教育は受けられず、読書熱、知的欲求を人一倍持ち続けるマギーにナレーターは共感の言葉を綴る。しかしタリヴァー家を悲劇が襲う。水利の係争に負けて破産の憂き目にあいマギーの生活も一変する中で彼女は豊かで艶やかな黒髪に輝く黒い瞳の美しい娘に成長していく。そこには自分の容貌に負い目のあったエリオットが、教養・知識を身につけることによって生涯の伴侶たる男性ルイスを得たが、その関係が不倫であるため父や兄、ヴィクトリア朝社会のバッシングを受けながらも、凜として創作を続ける作家自身が自分への応援として美化せずにはいられなかったと思われる。作家のこの私的な事情は物語後半のステューブン・ゲストとの駆け落ち以降のプロットでも切り離せない。

ここでもう一方のマードック作品におけるナレーターの役割はどのようなかについても検証しなくてはならない。彼女の作品ではエリオットの作品と違って登場人物たちが実に饒舌に道徳観、人生観を語る。ナレーターは時に登場人物（主に男性主人公）であり、作家自身であると思われる。Pricilla Martinによれば「ナレーターの判断はほとんどない」<sup>3)</sup>。しかしマードックは人物の顔つきや髪質感、部屋の壁紙から調度品などの描写は実に細かい。飲

食物の説明も料理番組のごとく鮮明であり、空気の冷たさや雨の変化も敏感に描いている。その描写の巧みさに読者は作品に引き込まれ、あたかもその場所に居合わせるような感がある。『鐘』においては、平信徒の信仰会のリーダーであるマイクルとメンバーたちの信頼が厚いジェームズの二人が物語の中で講話を行うが、それぞれの講話で宗教観や道徳観を述べる形式を取っている。すなわち登場人物たちが語るなのである。『鐘』に先立つ前三作と異なってプラトン哲学の影響が見られることは複数の批評家たちが指摘するところである。つまりこの時期にマードックの内で‘moral turn’が見られるというのである。1988年の Jonathan Miller とのインタビューのなかで次のように語っている。

1950年代に徐々に道徳哲学とプラトンへの関心に影響されるようになった。……空っぽの神のいるべき場所は何か絶対的な影響力のあるもので埋め合わせる必要があると感じ始めた。例えば道徳哲学あるいは新神学でも、人間の魂や人間の存在について極めて根本的な事柄を説明しようとするものが必要である。<sup>4)</sup>

こう述べて実存主義からプラトン主義への関心の移行を説明している。もともと大学時代のマードックは哲学に強い関心を持っていたのではないが、第二次世界大戦直後ヨーロッパで盛んだった実存主義に出会って、サルトルを敬愛する哲学者とみなすようになる。イギリスに戻ったマードックはケンブリッジ大学で哲学を学んだ後、フランスの哲学者 Simone Weil (1909-43) の書に触発されてプラトンの人間に関する深い叡智と洞察に心惹かれていったのである。

物語ではドーラは唯我的な暮らし方をして自己認識ができない元美術学生。美術史の研究者である夫ポール・グリーンフィールドと若くして結婚するが、そこに幸せを見いだせず家出を繰り返す。そのドーラがナショナル・ギャラリーで絵画と神の「啓示」とも言える出会いをして目覚める。次いで伝説の鐘を湖から引き揚げて鳴らす、さらには信仰会が崩壊した後の決断へとドーラの物語は進展する。『フロス河の水車場』では成長したマギーが従妹の婚約者同然の男性、スティーヴンと駆け落ちしかけるが、途中やはり目覚めて自分の信

念に従って引き返す。その後のマギーにコミュニティの審判はどうであったか。そして最後の場面でフロス河の洪水に襲われたとき、マギーがとった行動が示すものは何か。

こうした二つの物語の二人の若い女性たちの覚醒からの変化の過程を検証していく。覚醒はドーラにはナショナル・ギャラリーで、マギーにはスティーヴンとの駆け落ち途中の船上で訪れる。

## 2. 女性たちの覚醒のとき

### ドーラの場合：ナショナル・ギャラリーにて

『フロス河の水車場』ではマギーが主人公であるが、『鐘』ではドーラの他にもう一人の主人公がいる。多くの評論文では男性主人公であるマイクル・ミードへの言及が目立っている。研究の多くは同性愛者でありながら、平信徒の集まりである信仰会を運営するリーダーのマイクルが自分の性と信仰との狭間で苦悩する姿を分析するものである。しかし本論ではすでに述べたように女性主人公のドーラに焦点を当てる。彼女を端的に描写した Marvin Felheim の一文を Miles Leeson が著書 *Iris Murdoch: Philosophical Novelist* (2010) において援用している。

ドーラはインバーに最後に来て、去ったのも最後だった。そこで最初にしたことは湖のそばで靴を失くしたことだった。彼女は水が怖くて泳げなかった。最後の行動は湖にボートで漕ぎ出て、インバーは私のものだという一人だけの勝利宣言を心の中ですることだった。独りで泳ぎを覚え、もはや水の深さも怖くなかった。信仰会は失敗してメンバーたちは散り散りに去ったが、ドーラは自分自身を見出すことになった。<sup>5)</sup>

フェルヘイムが重要な指摘をしている。宗教的使命感を持っていた信仰会のメンバーたちは会の崩壊に伴い散り散りになったが、そうではないドーラは本当の自分を見出す旅をしたというのである。その旅の始まりはナショナル・ギャラリーで見たゲインズバラが描く彼の娘たちの肖像画との遭遇である。ドーラ

はこの絵画との出会いを「啓示」と受け止め「感謝の念や寛容さ、これまでの唯我的な考えを打ち壊す何か現実的なもの、何か完璧なものがある」(175)と感じた。これについて Anne Rowe は「ドーラが絵と感動的な出会いをしたことは、世俗では神の啓示と同等であり、ドーラに道徳的な方向を示したことになる。この深い感応が自分自身よりも他(者)の何かへの愛情の高まりを引き起こしている」<sup>6)</sup>と述べる。この指摘は重要だと思われる。何故なら「自分自身よりも他(者)の何かへの愛情……」部分はマードックが先出のヴェイユから借用した「注視」(attention) を使って他者への愛の眼差しを表現しているからであり、まさしく自分の関心事だけに執着せず他者へ注視できる一步を踏み出すきっかけを得たものと思われるからである。さらにマードックの伝記 *Iris: The Life of Iris Murdoch* (2001) の中で著者の Peter Conradi は次のように述べる。

マードックが善は神の代わりであるというプラトン哲学に強く刺激を受けて初めて書いた小説が『鐘』である。ドーラがナショナル・ギャラリーで出会ったゲインズバラの肖像画のように実物の絵画も含めて本物で崇高な伝統はいかなるものも進歩向上の方法を備えている。<sup>7)</sup>

コンラディはこのようにドーラが肖像画との出会いを得て善き方へ進み始めることを示唆している。

芸術と道徳の関係についてマードック自身の言葉を検証する。1988年の Jeffrey Meyers との対談では「偉大な芸術は勇氣と真実に関わっている。そこには真実の観念があり、錯覚はなく、自分本位の妄念を克服する力がある……」<sup>8)</sup>と語る。さらに *Existentialists and Mystics* (Peter Conradi ed., 1997) の中では「芸術と道徳の本質は愛である」<sup>9)</sup>と述べている。これらマードックの考えは既に1970年の著書『善の至高性』において「芸術は個々人の利己的で妄想的な限界を超越し、芸術鑑賞者の感性を拡大することができるのであり、それは一種の善の代わりなのである」<sup>10)</sup>と述べられ、芸術に重要な役割があることを明確に主張している。こうした分析からドーラは絵画との偶然の出会いによって自己認識のできない唯我的な生活から目覚めることになる。道徳的に善

き方向、成長を予感させる旅を始めることは確実だと思われる。

### マギーの場合：船上にて

もう一方の女性主人公マギーの道徳的覚醒はどのように訪れるのであろうか。生家の破産と父親の死という悲しみを経たマギーは、フェア・ビューティの典型である従妹のルーシーにこう語る。「幸福な人たちを見ると、腹立たしくなるの。歳をとるにつれていけなくなるような気がするわ——だんだん利己的になるような」(302) こう話すマギーは、利発だが「奇妙な子」と言われた少女から艶やかな黒髪と輝く黒い瞳を持つ聡明な娘に成長していた。ダーク・ビューティとしてまさしく「醜いあひるの子」が「白鳥」に変身したのである。破産に続く父親の死のため精神的にも経済的にも落ち込んでいる時に、ルーシーの婚約者になろうとしている町の名家、ゲスト家の息子スティーヴンに出会いお互いに魅かれ合う。彼に会う前にはマギーは兄トムが父親の敵と見る弁護士ウェイクムの息子フィリップと淡い交際をしていた。この交際はトムを怒らせていたが、マギーはフィリップから知的満足を得るばかりか十二、三歳のころの懐かしい自分たちを思い出すことができ、温かい気持ちになった。茜が谷での出会いの場面では、人生や生活への欲や執着を引き起こす読書を諦めたマギーにフィリップが諭す。「それは狭い禁欲主義です……詩や、芸術や、知識は神聖です。純粹です」(249) エリオットの芸術観は言葉こそ違え上述したマードックの芸術観と通底すると考えられる。二人の作家たちは偉大な芸術は人間を覚醒させ、善き方向へと導く力を持っていることを信じているからこそ小説を書き続けたはずである。

フィリップから慕われていることを承知しながら、スティーヴンの豊かで若々しい男性的な魅力に触れて恋心を抱く。マギーは既に子供ではなかったのである。そして彼の誘惑に抗しきれずフロス河のボート遊びに二人きりで出かけた結果、下る途中で「駆け落ち」状態になってしまう。駆け落ちを続ければ我が身の墮落ばかりかルーシーやフィリップ、そして何より兄のトムを裏切ることになる。スティーヴンへの愛を断ちがたい利己的な気持ちと裏切り行為の狭間で苦悩する。

船上で一夜を明かして朝の目覚めとともに精神の覚醒がもたらされた。だが本当の覚醒は目覚める直前の夢によってもたらされた。セント・オググの伝説のようにオググ聖者の漕ぐ小船に処女マリアが乗っているはずが、そこにトムとルーシーの姿を認めたのである。(381) マギーはここですっかり目覚める。「他の人たちに尽くさなければならない義務があり……その義務を損なう愛情は抑えなければならない」(385)、「私たちの心の中の神の声に従うためなんです——人生を浄めるすべての動機に忠実であるためなんです……」(387) マギーはこのようにスティーヴンに語りかける。

John Crombie Brownはこの物語において道徳的に重要な部分はほとんどマギーに集中しているとして、それは「善と悪との葛藤、キリスト教の精神と世俗世界の精神との葛藤を表現することである」<sup>11)</sup>と指摘する。善と悪との葛藤 (struggle between good and evil) というフレーズについてはマードックの著書『道徳への指針としての形而上学』(1992)に書かれた次の一文を連想せずにはいられない。「優れた小説は善と悪との闘い (the fight between good and evil) に関わるのであり、仮象から実在への長い旅である」<sup>12)</sup>。ブラウンが指摘している「キリスト教の精神と世俗世界の精神との葛藤」については、「神の声に従う」という自己犠牲の精神を持つこととスティーヴンの誘惑を受け入れたことの葛藤であろう。しかしマギーはスティーヴンに挑戦するような眼差しを向け、彼の官能的な誘惑を増長させたのは自分自身であることには恐らく気づいているはずである。だからこそ彼女自身の葛藤であり答えを出すのもマギー自身でなくてはならないのである。

エリオットは小説を執筆する以前に、シュトラウス『イエスの生涯』(1847)とフォイエルバッハ『キリスト教の本質』(1854)を翻訳出版している。その経歴からキリスト教の精神についても深い思索を重ねてきたはずである。そして何よりもテキストの中で作家はマギーにトマス・ア・ケンピス (Thomas a Kempis, 1380?-1471)の著書『キリストに倣いて』(1427ごろ)を読ませている。

さいわいなるかな、神のささやきたもう声をきき……さいわいなるかな、



外より響く声をきかず、内に教えたもう真理の、み声をきくひとは。……  
汝自身を棄てよ、汝自身を諦めよ、さらば汝、心に大いなる平安をたのしまん……放恣なる愛は減ぶべし (pp. 236-7)

マギーは少女時代にも、そして失意の中でも改めてこの言葉を読んでいたのである。筆者にはこの「読書」こそ船上の覚醒に先立つ「もう一つの覚醒」と呼ぶことが可能だと思われる。マギーは兄に勝る知識欲と理解力を持ち、それを自覚していた節がある。しかし当時のマギーには本当の満足感とは男性に伍しての教育・知識を得ることではないと思いつつも、それが何かはわからないでいた。改めてケンピスを読んだとき「自己放棄」こそが本当の満足感を得るための入り口ではないかと悟ったものと推測される。無論まだ思春期のマギーに「自己放棄」の何たるかを理解することは難しいが、ケンピスの言葉を胸に秘めていたからこそスティーヴンに「自己放棄して神の声に従う」と説得しようとしたものと思われる。結局マギーはスティーヴンと合意できぬまま別れて一人で兄のもと、生家へと帰るが、この後のマギーの運命には一層の厳しさが待つ。次章ではヴィクトリア朝の女性観、それに対するエリオットの考え方と宗教観と、マードックのそれらとを比較しながら議論を続ける。

### 3. 目覚めの後

#### セント・オググの女性たち

利発で知識欲にとんだ女性マギーを主人公にした物語『フロス河の水車場』はヴィクトリア朝の道徳規範の中で生きている人びとを描いている小説である。男女の領域がはっきり分化している「性のダブルスタンダード」は女性を「家庭の天使」と祭り上げながらも男性にとって都合の良い立場に位置付けていた。中産階級の女性たちにとって、家父長制社会の中では「結婚」が人生の最重要課題であったことはブロンテ姉妹を初めとするヴィクトリア朝作家たちが描く小説群にも数多くみられる。また産業革命後のイギリスでは国の経済を支えているという自負を持つ新興中産階級の台頭に伴ってリスペクタビリティとモラルティの思想が両輪となって彼らの存在意義を確かなものにしていった。

特に彼ら自身の道徳規範から逸脱することは彼らのコミュニティでの生存にかかわってくる。未婚のマギーが名家のステイーヴンと駆け落ちするなどんでもないことであった。百歩譲ってその後二人が結婚したなら、マギーを待ち受ける町の評判は違っていただろう。自らの道徳観、信念のもとに一人でセント・オググへ帰ってきた彼女には当然ながら冷たい批判の目が待っていた。それはマギーの想像以上で、彼女が道徳的に正しい行いをしたかどうかという問題ではなかった。特にこうした男女の問題では町の夫人たちの審判が道徳律となったことは想像に難くない。マギーの苦しみなど斟酌しないし、マギーをかばうステイーヴンの手紙も夫人たちの耳に届くはずもない。しかしマギーにとって町の人びとのバッシングには耐えられても兄トムの非常な拒絶は、彼女にとって家族の絆、大切な思い出を断ち切られるような打撃だった。作者のエリオット自身がルイスとの同棲のため兄から絶縁され、故郷にも戻れなくなっていた状況を思うと、物語はマギーに厳しすぎると見えて実は表面に現れる部分だけで道徳的逸脱行為だと決めつける夫人たちへの抗議を示しているとも受け取れる。マギーが物語の最後を迎える前にマードックのヒロインであるドーラの覚醒後を議論する。

### 伝説の鐘を鳴らす

ナショナル・ギャラリーで神の啓示とも言える絵画との出会いをしたドーラは自己発見の旅の一步を歩き始めた。その旅のクライマックスが湖から引き揚げた伝説の古い鐘を彼女が一人で鳴らす場面だと思われる。新しい鐘が尼僧院に設置される儀式を翌日に控え、鐘をすり替える計画が頓挫したためドーラは一人で古い鐘を鳴らす。Deborah Johnson は *The Key Women Writers* (Sue Roe ed., 1987) シリーズの *Iris Murdoch* において、テキストを引用して鐘とプラトンの「洞窟の比喩」の関係を論じている。

鐘の内部は暗く、誰も人の住んでいない洞窟に驚くほどよく似ている。ひっそりと垂れている大きな舌に、本当にそっと触れてみた。恐怖の念からまだ抜けきっていなかったもので、あわてて手をひっこめ、懐中電灯をつ

けた。青銅のゆるやかに傾斜した表面から浮き出すように、うずくまった姿が彼女に面と向かってきた。がっしりした形、美しい形、滑稽な形の姿が。鐘を作った者にとっては、単なる思索や空想の対象という以上の何かにみちあふれた姿が。(248)

マードックはこの鐘の暗い内部を‘cave’と表現し、読者である我々はその間にプラトンの「洞窟の比喩」を思い起こすことになるだろう。これはプラトンの『国家』第七巻で述べられている比喩で、洞窟状の住居の中で囚人たちが壁に向かって拘束されている。後方には低い仕切りと通路がありそのまた後方で火が燃えている。囚人たちはその火によって壁に映し出される自分たちの影と通路を往来する物体の影を見ることができる。しかし後に解放された囚人が火を、遂には外の太陽を目にして、これまで見て来たものは実物ではないことを知る。真実の世界を認識するための遍歴の喩えである。マードックは著書『火と太陽—なぜプラトンは芸術家たちを追放したのか』(1977)で、「洞窟の比喩」を説明するとともに「太陽は善の形をしており、その光のもとで真実が見られる」<sup>13)</sup>と記す。ナショナル・ギャラリーでの啓示を受けて自己認識に目覚めたドーラはこの洞窟の比喩でいえば火を見た囚人がこれまで見ていたものが影であることに気付く段階である。しかしまだ太陽を見てはいない。

ジョンソンはテキストのこの箇所から「宗教的であると同時に官能的」<sup>14)</sup>であることを想起し、そしてそれがイメージするものは暗黙裡に鐘は「女性性と結びつく」<sup>15)</sup>ことを主張する。彼女はフェミニスト批評の立場で論じているが、マードック作品から「公的な〈男性〉哲学者の声に対して、私的な〈女性〉詩人の声を掬い取る」<sup>16)</sup>意図を試みている。まさに‘cave’が使われたとき彼女はマードックの女性詩人の声が聞けることを期待したはずである。この意図は Luce Irigaray をはじめとするフェミニストたちの主張の中にあっては試験的な読みであったからである。テキストの同じ部分を引用したリーソンはジョンソンの性別と自我の認識の描写だとする意見の一部は認めるものの、ドーラだけの言及では不十分だと考える。彼は古い鐘と新しい鐘とのすり替え計画でドーラと一緒に行動したトビーが、マイクルとの同性愛とドーラとの異性愛の間で

混乱状態に陥っていて、その原因となるマイクルの苦悩を考慮すべきだと言う。リーソンは「マードックが1958-70年の時期に書いた小説では同性愛と女性という二つの社会的差別を描いている」<sup>17)</sup>ことを指摘する。60年代のイギリス社会は‘permissive society’と呼ばれる。しかしリーソンはマードックが同性愛者と女性にとっては寛容な社会ではないと述べていることから、女性と同性愛者の二人を主人公にして『鐘』を書き、その後も『かなり名誉ある敗北』(1970)、『本と仲間たち』(1987)など同性愛を取り巻く社会的環境が変化しても多くの作品に同性愛者を登場させて、同性愛の社会的な意味合いを考察し続けていると述べる<sup>18)</sup>。

議論をドーラに戻すと、筆者はマードックがドーラに自己認識をさせて自分の意志で物事を決定していくという、人としての成長を託しているとの読み方をしている。小説が書かれた当時でも女性、特に結婚を控えた女性たちが戦前からの家父長制の観念に縛られていたことは容易に想像できる。ドーラの母親ばかりか彼女自身も自分より上流階級で裕福な夫との結婚は一見望ましいものであった。しかしドーラはその結婚に自分の幸せを見いだせないことに気付くのであるが、筆者にはそれが家父長制を否定する行為というよりもドーラ自身が人としての本当の幸せとは何かの答えを探そうとする行為だと思える。なぜならばマードックは1976-77年に Michael O. Bellamy、Jack I. Biles との対談において次のように女性観を語っているからである。

ウーマン・リブの支持者であるが女性問題に寄与する活動には関心がなく、人は男女の別なく人間であること、そして人類という同じ土俵に参加することを主張する。そのためにも女性の教育についてはその推進を強く願っている。<sup>19)</sup>

善の形をした太陽を見るために、すなわち自己認識から一段階進むためにはこの‘cave’を内包する鐘との対峙が不可欠だと強く感じる。鐘には「われは愛の声なり。我が名はゲイブリエル」(205)という銘が刻まれている。

セント・オッグの町で耐え忍ぶマギーと伝説の鐘を一人で鳴らしたドーラ、

この二人に最後の決断の時が迫っている。それぞれの場面で覚醒した二人はそれぞれの道を歩いてきた。そしていよいよ物語の結末を迎えようとしている。

#### 4. 生と死を分けた二つの決断

##### ドーラは生き延びた

ドーラが古い鐘を鳴り響かせたことは、その後続く信仰会崩壊までの一連の出来事の始まりだった。尼僧院に設置するはずの鐘が途中で手押し車から湖に転落する事故が発生した。それをきっかけに尼僧になる直前のキャサリンが湖に入水し泳げないドーラが、続いて一人の尼僧も手伝ってその命を救う。そればかりかキャサリンの双子の兄で、かつてマイクルの同性愛の相手であったニックが自殺をする。マイクルはその責任を取るべく信仰会を解散する。会のメンバーが去っていく中インバーに留まってマイクルの手助けをするドーラはマイクルを勘ぐったり裁いたりせず、見返りを求めない無償の愛を知った。これは2章でも触れた「注視」すなわち他者への愛の眼差しを向けることができた状態である。マードックの「個人的な実在へ向けられた正しい、愛の眼差しの観念を表現するためにシモーヌ・ヴェイユから借用した語で、活動的な道徳的行為者を表す固有の、適切な表現である」<sup>20)</sup>という考えであり、プラトンの‘*unselfing*’の観念だといえよう。ドーラはゲインズバラの肖像画に覚醒された後ここに至って絵の勉強を再開し、職を得て夫のもとには帰らず自立する決心をする。物語の終盤で一度はマイクルの、もう一度は彼女自身の言葉として「ドーラ（私）は生き延びたのだ」（285, 296）の一文が語られる。これは実際の生死に言及しているというよりも、夫からの自立、他者へ愛の眼差しを向けることができるほどに成長したことを評価しているのだと思われる。

ではドーラの成長に欠かせなかった鐘は何のシンボルなのか、鐘の持つイメージは何か。ジェームズとマイクルがともに「正しい生活の必要条件は……」（119, 185）で始める講話の中で鐘に言及しているが、Antonia S. Byattは著書 *Degrees of Freedom* (1965) の中で「人間の持つ精神の本質を表す記号として鐘を使っている」<sup>21)</sup>と言う。ジェームズの講話では次のように話される。

ところで何が純潔のしるしでありましょう……鐘は語るために造られてある……機械じかけが秘めてあるわけではなく、すべては平明であからさまなのであります (123)

彼は正しい生活に主として必要なものは、自分自身についてどんなイメージも持たずに暮らすことだと述べて、鐘を尼僧になろうとする純潔のキャサリンと重ね合わせている。一方マイクルはジェームズの講話に答えるように鐘のイメージを次のように説く。

鐘は重力に従います……我々の精神力の機械仕掛けを知り、どこにその精神力がひそんでいるかを見つけ出さねばなりません……自分の能力を知ってそれを用いる術を学ばなければならない。鳩のように無害であるだけではなく、蛇のように賢くあれ (189)

正しい生活の必要条件は自分の能力についての概念を持つことだと語るマイクルの想いは、おそらく自分の本性に逆らわずに生きることの困難さを感じながらも、鐘が一方から加えられた力を用いて鳴り続ける力の仕組みを理解すること、すなわち自己認識につながることを説きたいのだと推測する。筆者にはそこに成長を続けるドーラの姿が重なる。リーソンはマイクルの講話はプラトンの的であると指摘する。物語の最後でマイクルが「神は存在する。しかし私は神を信じない」(409)という思いに至るが、これは続いて検証するマードックの宗教観を反映していると思っている。

マードックはインタビューなどで宗教について聞かれると、例えば1976年 Stephen Glover にこう答えた。

自分は個人的な神は信じていないし、キリストの神格も信じていない。キリスト教のドグマのようなものがない仏教に共感を覚える。しかし近年キリスト教も含めた宗教への信仰には深い関心がある。<sup>22)</sup>

ここでは1章ですでに紹介した1988年のミラーとのインタビューと合わせて考えたい。マードックは神が不在の現代では道徳哲学の役割が重要であると考えている。また『善の至高性』の中では「善き人とはどのような人であろうか。……われわれは自らを道徳的に改善することが可能だろうか」<sup>23)</sup>と問うている。彼女はそれに答えるのは哲学者だと述べるが、文学作品を通じてこの問いの答えを追求するならば、我々もそれを追求しなくてはならないと思う読者も多数いるはずである。

ドーラの成長を締めくくるにあたりマードックの宗教観、道徳観を考察したが、続いて物語の結末について賛否の論評が多い『フロス河の水車場』の終盤を検証して本作品におけるエリオットの宗教観、道徳観を明らかにしたい。

### 最後のたたかい

マギーが一人セント・オッグの町の夫人たちの冷たい視線とトムとの絶縁状態に耐える日々を送っているなか、フロス河の洪水が起きる。マギーは夢中でボートで生家へ向かい、トムとともに避難しようとするがボートごと濁流に呑まれてしまう。兄妹二人が溺れ死んでしまう結末には発表当時から賛否の議論は続いている。あまりに唐突であるという批判を受けるのであるが、作者自身は初めからこの結末を想定して準備を進めていたのである。この点について内田能嗣は次のように記す。

彼女 [エリオット] はこの小説を起稿する以前から極めて綿密にいろいろの川に取材旅行をし、過去の洪水の記録を掘り起こして、悲劇的結末のための用意をしている。<sup>24)</sup>

作者が思い付きで出した結末ではなく、実に周到に準備したうえでこの物語の最後を思い描いていたのである。自伝的小説であれば作者にとっては物語の最後をいかに締めくくるかは重要な問題である。自分を投影しているマギーが当時の道徳規範から逸脱しているとなればなおさらである。兄との仲直りは作者が現実の世界で望んでいたことであり、ぜひとも実現させたかったのである。

つまりナレーターとしてのエリオットはマギーが成長した後は彼女に厳しい態度で語ってきたが、洪水の日を迎えるとマギーを少女時代の衝動的だが活力ある女性として語っている。濁流も恐れずボートを漕ぎ出したマギーの気持ちをこう説明する。「兄への強い愛情が甦った、無慈悲な怒りや誤解から受けた最近の印象のすべてを一掃して、幼い昔に結ばれた、深い、根本的な、ゆるぎない追憶のみを残して」(419)そして言葉通り二人は「兄と妹は二度と離れることなく抱き合ったまま沈んでしまった。仲良く小さな手を握りあって、雛菊の咲く野をさまよった日を、崇高な一瞬にふたたび生きかえらせて」(422)最後の一瞬ながら兄妹が和解する場面はエリオットにとって不可欠であるとする心理は、現実のルイスとの関係をふしだらなものとしさせず、彼女自身がいかに厳しい道徳規範を持っていたかを示すために家族の絆の再生という形で見せたものと筆者は推測する。

そのためのフロス河の氾濫と溺死への道筋は物語の初めからたびたび伏線が敷かれていた。ヘンリーは「エリオットにとって水死はことさら心惹かれる死に方である」<sup>25)</sup>と述べて『アダム・ビード』(1859)ほかの作品で水死した登場人物たちの名前を挙げている。そして『フロス河の水車場』については結末を予想させる場面を紹介している。物語の初めの部分で母親がマギーに小言を言う。「水ぎわへ行っちゃいけない……いつかは水のなかへころがり落ちて溺れてしまうよ……」(12)あるいはマギーが来客に得意げに見せる本がダニエル・デフォー (Daniel Defoe, 1660-1731) の『悪魔の歴史』(*The History of the Devil*, 1726)なのだが、そこに書かれる魔女の見分け方を客に説明する。裁判にかけられた女は水にいれられ泳げれば魔女、泳げなければ魔女ではないが溺れてしまう、いずれにしてもこの女には死が待っていることになる(17)。こうしたたとえ話にマギーは本能的に自分の運命を予感している。そして兄トムへの敬愛の念、家族への忠誠心を抱き続けてどんな選択をしようとも、マギーは兄たちを失ってしまうことに気付いているのだと、ヘンリーは見ている。エリオットの物語構成の巧みさが表れた場面だと思われる。しかも主人公マギーが読んでいる本がうまく活かされていることはすでに「船上の覚醒」で述べたケンピスの『キリストに倣いて』で確認済みである。



筆者にとって水死はマードック作品における登場人物たちの水死の例を想起させられる。『海よ、海』（1978）のタイタス、『ジャクソンのジレンマ』（1995）では弟を溺死させた罪悪感を持つエドワードなど。ただしマードックは溺死とともに水の事故に遭うが、無事生還する人物も多数描いている。『ブルーノの夢』（1969）ではまさに主人公が洪水から生還する。彼女の水泳好きはつとに有名で作中「水」を多用するため「水のイメージ」に関する論評は多数なされているのでここでは水についての言及は避ける。ただ筆者には『フロス河の水車場』では物語の最初と最後が水の場面であることは興味深く、いわば誕生と死（結末は文字通り主人公たちの溺死であるのだが）とも受け取れるのである。川の氾濫で全ては浄化、リセットされたと理解しては安易に過ぎるかもしれないが、唐突な結末という批判に対しておそらくエリオットはその批評こそ彼女が期待したものではなかったかと思われる。

## 結 び

エリオットとマードックの描くマギーとドーラの二人の若い女性たちの結末は大きく分かれた。一人は溺死、もう一人は夫を頼らず新たに仕事を見つけ未来に向けて歩き出す。それぞれの結末を迎えはしたが、女性観、道徳観の検証を重ねての議論から二つの作品に描かれたマギーとドーラに通底する道徳観は明らかにできたものと思われる。本論の結びにあたって通底する道徳観とは何かを述べる。百年の時代差の中で女性を取り巻く環境は変化を見たものの人間の道徳観はどうであろうか。マードックは1960年代でさえ「社会は女性に寛容ではない」と言っているが、高等教育を受ける女性が増え彼女自身大学教師である。一方ヴィクトリア朝での女子教育は良妻賢母を育てるためのものに過ぎない中であってエリオットの知性は破格である。そうした作家たちの知的環境は異なるものの、主人公たちが物語の結末で選択した結果には共通性があると推測する。それは二人がともに主体性を持って決断を下した、そういう選択ができたということである。それぞれの場面で覚醒したとき、二人はともに自己本位な考え方を克服して、他者に向ける愛の眼差しである「注視」という考えを得るのである。

マギーに関してはトム、フィリップやルーシーたち他者を慮って駆け落ちを打ち切る。町の人びとからは手厳しい審判を受けるが、マギーが自らの強い意志で出した決断だった。さらに洪水の中それまでの兄トムに支配された確執も忘れて兄の救出に向かう。ここでもマギーの揺るぎない主体性が発揮されたものと思われる。ではドーラはどうか。彼女の場合も、湖から引き揚げた鐘を一人で鳴らす場面では、これまで夫に頼りながらも反発してきた曖昧な自分に決別するべく鐘を鳴らす行為には、ドーラの強い意志を見る。物語終盤入水したキャサリンを泳げないのに救出しようとするときの他者への注視、同性愛と信仰の狭間で悩み、その果てにニックを死に至らせた後悔で苦しむマイクルに何の詮索もしない寛容さは周囲の人びとに影響されないドーラの主体的な行動である。エリオットとマードックがそれぞれの女性観、道徳観を持って描いた主人公たちには百年の時空を超えて、このように相通ずる道徳観が見られるのである。

すでに述べたように中産階級の人々が自負を持って生きるための一つとしてモラルティがある。その規範から逸脱すれば厳しく罰せられる。そのモラルティをただ従前どおり守るばかりではなく、改善した方が良いと考える人たちがいても不思議ではない。さらに道徳的に「善く生きる」あるいは「どうしたら善く生きられるか」を模索する人たちもいるだろう。様々な機会を通して他国の文化・思想にふれた人々なら自国のそれらと比較するのは当然である。そして他者が持つ相違点は尊重されるべきものだという考え方に至る場合もあるだろう。エリオットはどうか。ルイスと一緒にドイツへ行き、スピノザ、コント、フォイエルバッハなどの思想家たちの著書を翻訳する中でどんな影響を受けたのだろうか。生来の知性に加えて哲学や思想を学びエリオットの道徳観は熟成されたと思われる。マードックも同様に自身の経歴に加えてサルトル、ノーベル文学賞受賞者の Elias Canetti (1905-94) など現代の知性派との親交も彼女の思想形成に大きく影響したはずである。該博な知識とともにこうした状況が二人の作家を支えて、通底する道徳観をもたらしめているものと考えられる。

注

- 1) Avrom Fleishman. *George Eliot's Intellectual Life*. Cambridge: Cambridge U.P., 2010, p. 101
- 2) Nancy Henry. *The Cambridge Introduction to George Eliot*. Cambridge: Cambridge U.P., 2008, p. 89
- 3) Pricilla Martin. 'The Preacher's Tone: Murdoch's Mentors and Moralists', Anne Rowe and Avril Horner eds., *Iris Murdoch and Morality*. Hampshire: Palgrave Macmillan, 2010, p. 34
- 4) Jonathan Miller. 'My God: Iris Murdoch Interviewed by Jonathan Miller', Gillian Dooly ed., *From a Tiny Corner in the House of Fiction*. Columbia: University of South Carolina, 2003, p. 211
- 5) Miles Leeson. *Iris Murdoch: Philosophical Novelist*. London: Continuum International Publishing Group, 2010, p. 211
- 6) Anne Rowe. 'The Dream that does not Cease to Haunt us: Iris Murdoch's Holiness', Anne Rowe and Avril Horner eds., *Iris Murdoch and Morality*. Hampshire: Palgrave Macmillan, 2010, pp. 147-8
- 7) Peter Conradi. *Iris: The Life of Iris Murdoch*. New York: Norton & Company, Norton Paperback, 2002, p. 422 [2001]
- 8) Jeffery Meyers. 'Two Interviews with Iris Murdoch', Gillian Dooley ed., *From a Tiny Corner in the House of Fiction*. Columbia: University of South Carolina, 2003, pp. 225-6
- 9) Peter Conradi ed., *Existentialists and Mystics*. New York: Penguin Books, 1999, p. 215 [1997]
- 10) Iris Murdoch. *The Sovereignty of Good*. New York: Routledge, 2007, p. 85 [1970]
- 11) John Crombie Brown. *The Ethics of George Eliot's Works*. Boston: Indy Publish, 2006, p. 20
- 12) Iris Murdoch. *Metaphysics as a Guide to Morals*. London: Random House, Vintage, 2003, p. 97 [1992]
- 13) Iris Murdoch. *The Fire and the Sun—Why Plato Banished the Artists*. New York: Viking Penguin, 1990, p. 4 [1970]
- 14) Deborah Johnson. *Iris Murdoch*. Brighton: Harvest Press, 1987, p. 85
- 15) Ibid. p. 85
- 16) Ibid. p. 95
- 17) Miles Leeson. *Iris Murdoch: Philosophical Novelist*. London: Continuum International Publishing Group, 2010, p. 96
- 18) Ibid. p. 97

- 19) Michael O. Bellamy. 'An Interview with Iris Murdoch', Gillian Dooly ed., *From a Tiny Corner in the House of Fiction*. Columbia: University of South Carolina, 2003, p. 48
- 20) Iris Murdoch. *The Sovereignty of Good*. New York: Routledge, 2007, p. 33 [1970]
- 21) Antonia S. Byatte. *Degrees of Freedom*. London: Chatto and Windus, 1965, p. 76
- 22) Stephen Glover. 'Iris Murdoch Talks to Stephen Glover', Gillian Dooly ed., *From a Tiny Corner in the House of Fiction*. Columbia: University of South Carolina, 2003, p. 43
- 23) Iris Murdoch. *The Sovereignty of Good*. New York: Routledge, 2007, p. 51 [1970]
- 24) 内田能嗣編 『ヴィクトリア朝の小説—女性と結婚—』 英宝社、2002年、p. 213 [1999年]
- 25) Nancy Henry. *The Cambridge Introduction to George Eliot*. Cambridge: Cambridge U.P., 2008, p. 58

#### 引用テキスト

George Eliot. *The Mill on the Floss*. New York: Norton & Company, 1994 [1860]

Iris Murdoch. *The Bell*. New York: Penguin Books, 2001 [1958]

本文中のテキスト引用についてはカッコ内にページ数のみ記載する。

アイリス・マードック作品の日本語名は以下を参照する。

日本アイリス・マードック学会編 『アイリス・マードックを読む』 彩流社、2008年